

家族、田畑、故郷などあたりまえの世界が失われた3.11東日本大震災
被災農家に寄り添い続ける普及指導員の「力」の源泉は何なのか？
普及指導員の役割とは？ 山下祐介、宇根豊らの解説も所収

平成29年2月
発行予定

『聞く力・つなぐ力』

……東日本大震災と普及指導員……

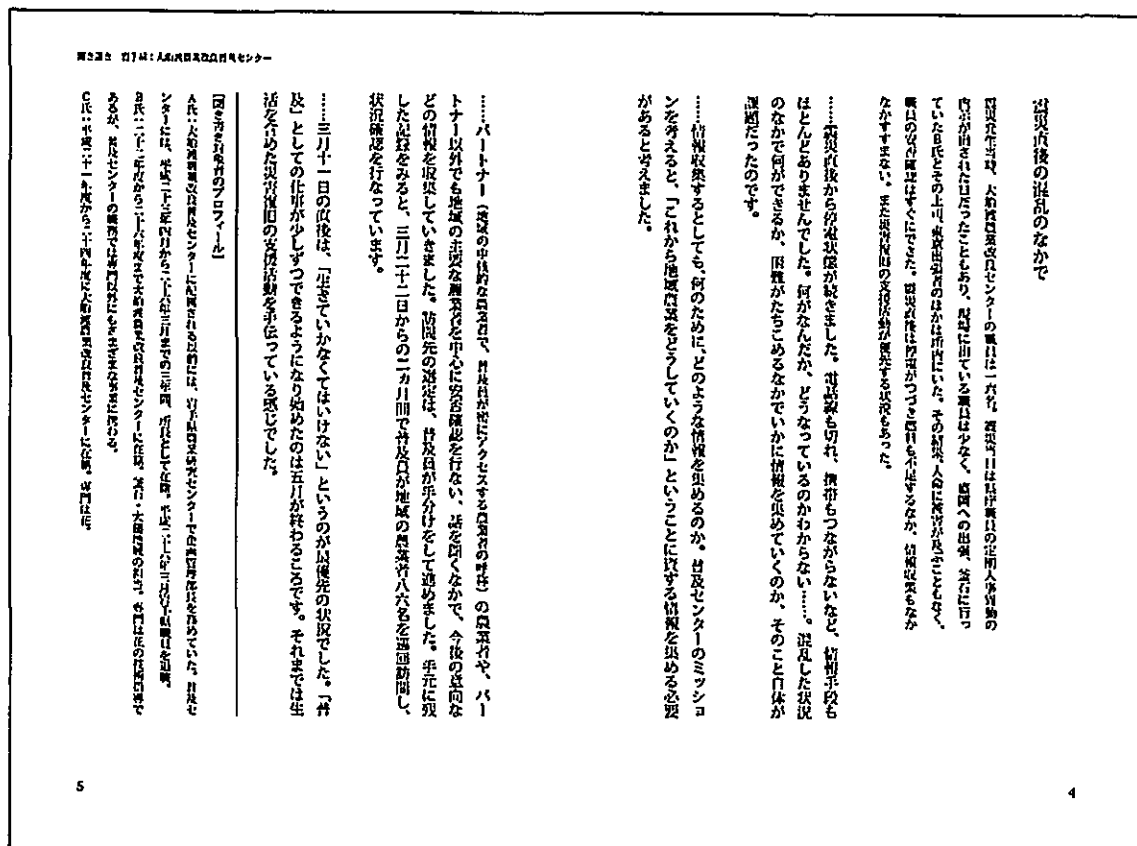
日本農業普及学会・編 農文協刊 四六判 232頁 予価1,800円+税

■ 3.11被災農家とそれに寄り添い続けた指導員の苦闘と希望を より多くの方に知って欲しい！

本書企画の最大の狙いは、東日本大震災からの復旧・復興に果たした普及指導員の役割の大きさを、ひいては、全国各地で日々活動している普及指導員の仕事の意味を、関係者の枠を超えて広く伝えることです。

県という行政機関（政策を遂行させる側）の一員である普及指導員ですが、一方で農業の専門家としてどのように農家に寄り添い、農家及び農業の復興（振興）にどのように関わってゆくのか、大震災は、普及指導員のあり方を問う機会ともなりました。震災の現場で苦闘した普及員の実践を聞き書きして編集した本書は、読者を感動ともに普及員としての生き方に共感を覚え、普及員の存在価値を再確認することになっています。

↓ 頁見本



【 聞く力・つなぐ力 】 目次

はじめに

佐藤了 日本農業普及学会会長

本書の成り立ち…大震災ならびに原発の深刻事故に直面し、持ち場に踏み止まって奮闘した普及指導員たちの臨場記録(物語り)である。大災害という異常時にあって、次々と襲いかかる問題やストレスをくぐり抜けつつ職務に立ち向かい農家とともに歩みたいと願う普及指導員たちの姿と胸の内が率直に語られている。仲間の普及員だけでなく、多くの人に普及の仕事を知っていただく機会としたい。

I 聞き書き 東日本大震災と普及指導員

1. 岩手県

大船渡農業改良普及センター

- ・震災直後の混乱のなかで
- ・「災害復興対策会議」の果たした役割
- ・情報の共有と職員のメンタル面への配慮
- ・被災農業者の「聞き手になる」こと
- ・立ち上げられた「希望ときずな農業チーム」
- ・正確な情報を伝えることが求められた福島第一原発事故
- ・県を越えた協力
- ・ストレスにどう向き合ったか
- ・震災の経験をどう生かすか

2. 宮城県

石巻農業改良普及センター

- ・合同庁舎が津波被災、業務不能の状態に
- ・当初の記録は紙、鉛筆、携帯だけ
- ・現地調査から農地の復旧へ
- ・法人化、大規模化を軸にすすめられた農業・農村復興
- ・情報不足に苦慮した放射能対策
- ・他県からの技術支援に感謝
- ・被災した農家とどう向き合ったか
- ・普及指導員がうけたさまざまなストレス
- ・災害対策で重要なのは平時からの準備
- ・現場とのつながりが普及を支える

3. 宮城県

仙台・亘理農業改良普及センター

- ・安否確認・農地の被害調査から始まった情報収集
- ・苦しさに向き合いながら農家の聞き手になる
- ・普及のノウハウと関係機関の連携を生かした復興
- ・放射能対策はサンプリング調査と吸収抑制技術の普及が中心
- ・復旧・復興の経験をどう生かすか

4. 福島県

伊達農業普及所

- ・原発事故への対応がすべてのはじまり
- ・関係機関との連携のもと整備される検査体制
- ・不安の渦中にある農家にどう寄り添うか
- ・施設園芸を中心にした農業復興
- ・研究機関との連携で進められた放射性物質対策
- ・風評被害に耐える
- ・農政事務所からの支援や普及所間の協力
- ・危機のなかでつかんだ「普及」の意味(=「縁の下の力持ち」。農家の状況によって、上からの命令を待つのではなく、自主的に動ける組織だ)

5. 福島県

相双農林事務所(農業振興普及部)

- ・安否確認のなか高まる原発事故への危機感
- ・農家の不安と怒りに向き合う
- ・農家の意向を重視し現場の取組みを支援
- ・現場とのつながりを生かした放射能汚染対策
- ・震災から四年半経過後の課題
- ・「農家とともに」の再確認

《事例の構成》

- ① イトル/②各普及センターの簡潔な紹介と震災前後の管内の概況(当該地域に不慣れな読者のために)/③事例記事(聞き書き)

II 解説 危機のなかで立ち上がった普及指導員たち

- ・前例や枠組みにとらわれない普及活動
古川 勉(元大船渡農業改良普及センター所長)
- ・寄り添う、支える、ともに歩む
-被災地で求められる普及指導員の役割-
行友 弥(農中総研/元毎日記者)
- ・農の持続性は誰のために、誰の努力で支えられているのか
山下 祐介(首都大学東京准教授、社会学)
- ・普及指導員が情愛を再発見するとき
宇根 豊(農と自然の研究所代表)